

修士論文（要旨）

2017年7月

家族介護者支援に向けた理論モデルの構築

ーストレスコーピングに着目してー

指導 長田 久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

215J6903

関野 明子

Master's Thesis (Abstract)
July 2017

A Stress and Coping Model for Family Caregiver Support

Akiko Sekino

215J6903

Master's Program in Gerontology

Graduate School of Gerontology

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor : Hisao Osada

目次

第1章 はじめに

I. 社会的背景	1
II. 先行研究	2
III. 研究の目的と意義	3

第2章 研究方法

I. 研究枠組	3
II. モデル選択の理由	4
III. 分析単位の定義	5
IV. 対象	6
V. 調査項目	7
VI. 倫理的配慮	7
VII. 分析方法	8
VIII. 概念の操作化	9
IX. 妥当性について	10

第3章 結果と考察

I. 各事例の結果	10
II. 各事例の結果と先行研究による概念の検証	21
III. 概念の再配置による理論モデルの構築	24
IV. 家族介護者ストレスモデルにおける結果の考察	26
V. 中範囲理論としての可能性	27
VI. 本研究の限界と今後の課題	27

第4章 結語

謝辞

参考文献

【資料】

- ・家族介護者ストレスモデルによる各事例の分析結果
- ・分析シート
- ・コンテンツシート

第1章 はじめに

2000年4月に介護保険制度が実施されてから15年以上が経過した。厚生労働省の調査では要介護認定者・サービス利用者数も共に2.5倍以上に増えていることから、利用者数増加という視点においては介護保険制度が国民に浸透していることが伺える。しかし、介護者の介護負担は軽減できておらず、家族の介護負担を軽減するために「介護の社会化」を掲げスタートした介護保険だが、介護負担軽減の観点からは介護の社会化は達成されていないと言えるだろう。

一方、学術的な視点で捉えるとどのようなことが言えるであろうか。1980年代以降、高齢者介護が社会的な課題であるという認識が進むにつれて家族介護者の研究は増え続け、様々な視点、様々な学問領域からのアプローチが試みられている。しかし、家族介護者支援を目的とした多くの研究成果が在宅介護の現場で有用に活用し切れていない現状があり、そのような研究上の理論的問題もまた、介護負担の軽減を阻む一因になっているのではないかと考えた。

〈研究の目的と意義〉

本研究の目的は、在宅介護という状況が発生したときに、家族介護者はどのように状況を評価し対処しているのかを明らかにし、家族介護者が必要とする支援を模索できるような理論モデルを構築することである。これまでに十分注目されてこなかった家族介護者主体の包括的な状況評価が、家族介護者の必要とする支援の把握につながるということを示すと共に、介護の個別性を考慮した支援の必要性を提起することができると考えている。

第2章 研究方法

〈研究枠組〉

本研究では、目的にある「在宅介護という状況が発生したときに、家族介護者はどのように状況を評価し対処しているのか」を明らかにするために、家族介護者のストレスコーピングに着目する。中でも、在宅介護は被介護者と介護者の二者の関係のみでなく、家族の問題としてとらえる方がより現実的であるため、家族社会学で発展してきた家族ストレス理論であるMcCubbinの二重ABC-Xモデルに注目した。このモデルの枠組みを用いて事例ごとのストレスコーピングに関する概念を整理し、理論構築の土台とする。その観点からみてこのモデルを選択した理由は以下の通りである。①個別性が考慮されている。②時間的要因を理論に組み込んでいる。③ストレスラーが累積していくという概念がある。④拡張性がある。

本研究の対象者は主介護者である個人であり、家族ストレス理論を援用して、個人のストレスコーピングモデルを構築する研究である。

〈対象〉

対象者は、A市にて65歳以上の要介護高齢者を在宅で介護している家族の中で、最も介護活動に従事している人（主介護者）4名である。対象者の年齢は54歳～88歳（平均74.5歳）。内訳は女性2名、男性2名。うち配偶者3名、娘1名である。

〈調査項目〉

基本属性と適応状態の参考のためにZarit介護負担尺度日本語版の短縮版と今の状況がこのまま続くとした場合の心境を質問紙にて調査した。インタビューは半構造化面接で行った。

本研究は桜美林大学研究倫理委員会の承認を得ている。

〈分析方法〉

分析方法には質的内容分析(Mayring 2000,2004)を使用した。質的内容分析はデータからカテゴリーを生成するのではなく、既存理論に由来したカテゴリーにデータを割り振る目的で使用できる。またカテゴリーが画一化されるので、事例ごとの比較がしやすい点も選んだ理由である。本研究は以下の手順で分析を進めていく。

① インタビューデータから帰納的に概念を抽出。② 二重 ABC-X モデル内の概念をカテゴリーとみなし、そのカテゴリーに①で抽出した概念を演繹的に割り振る。③ ②の作業で、カテゴリーに適合しなかった「不適合概念」、つまり二重 ABC-X モデルでは説明不十分である概念を選出する。④ 各対象者の「不適合概念」を比較し、先行研究の知見を参考に概念を再配置し、新しい理論を構築する。

第3章 結果と考察

事例ごとに分析し、不適合概念を比較した結果、以下のことが示された。

①「資源」でも介護状況に対して肯定的に作用するものもあれば、否定的に作用するものがある。②「認知」も介護状況に対して肯定的に作用するものと、否定的に作用するものとしての分類が可能なのではないか。③前危機・後危機の2段階の位相では適切な状況評価ができない場合がある。④対処過程はプロセスとして認識するよりも、対処、認知、資源の相互作用が顕著であった。⑤対処の結果から生じるストレス源の累積を明確化する必要がある。

〈概念の再配置による理論モデルの構築〉

調査結果と先行研究の知見を照合した上で、概念を再配置し理論モデルの構築を行った。以降それを、「家族介護者ストレスモデル」と呼ぶ。

第4章 結語

本研究では、家族ストレス理論である二重 ABC-X モデルを援用して、インタビューデータに基づき、家族介護者ストレスモデルを構築した。既存モデルにはない、本モデルの特徴は以下の通りである。

①介護状況の中で活用し得る、資源や認知の働き方に注目し、「肯定的効果」「否定的効果」で分類した。②対処は、資源、認知、対処行動の相互作用とし、その力動性を重視した。③対処の効果判定の一つとして、対処が逆にストレス源になるという方向性を明確化した。④経時的な評価に対応するため、連結して使用できるよう、その拡張性を強化した。

以上のように、本研究においては、その個別性を考慮し、実際に家族介護者支援に活用するための道具として、家族介護者ストレスモデルを構築した。構築過程にはまだ検討の余地があり、道具として機能できるかは課題の残る所である。しかし、介護の現場で使用し、家族介護者の反応でまた、研究者は道具を改良し、そしてまた介護の現場に還元するという繰り返しが、理論モデルの研鑽になると考えている。家族介護者の真のニーズを把握できていないという課題があるのであれば、実証研究と介護の現場をつなぐ理論モデルの役割は今後注目していくべき価値があるだろう。

(引用文献)

- 1). 厚生労働省 平成 27 年度介護保険事業状況報告 (年報) (2015)
<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/15/index.html> ,2017.7.4 取得
- 2). 杉原陽子, 杉澤秀博, 中谷陽明: 介護保険制度の導入・改訂前後における居宅サービス利用と介護負担感の変化 - 反復横断調査に基づく経年変化の把握 -. 厚生指標, 59(15)
- 3). 公益財団法人生命保険文化センター: 平成 19 年度生活保障に関する調査. 41-42.
- 4). 公益財団法人生命保険文化センター: 平成 28 年度生活保障に関する調査. 59-63.
- 5). 白澤政和: 介護の不安を解消するために. 高齢者の不安—経済、健康、孤独—advances Aging and Health Reserch2014 公益財団法人長寿科学振興財団, 115-125 (2015) .
- 6). 湯原悦子: 家族介護者支援の理論的根拠. 日本福祉大学社会福祉論集, 130 : 1-14 (2014) .
- 7). 湯原悦子: イギリスとオーストラリアの介護者法の検討 - 日本における介護者支援のために -. 日本福祉大学社会福祉論集, 122 : 41-52 (2010) .
- 8). 櫻井成美: 介護肯定感をもつ負担軽減効果. 心理学研究, 70 (3) : 203 - 210 (1999) .
- 9). 陶山啓子, 河野理恵, 河野保子: 家族介護者の介護肯定感の形成に関する要因分析. 老年社会科学, 25 (4) : 461 - 470 (2004) .
- 10). 宮坂啓子, 藤田君支, 田淵康子: 認知症高齢者を介護する家族の介護肯定感に関する研究. 老年看護学, 18 (2) : 58 - 66 (2014) .
- 11). Lawton M, Kleban M, Moss M, Rovine M, Glicksman A: Measuring Caregiving Appraisal. Journal of Gerontology. Journal of Gerontology: PSYCHOLOGICAL SCIENCES, 44 (3) : 61-71 (1989) .
- 12). Lawton M, Moss M, Kleban M, Glicksman A, Rovine M: A Two-Factor Model of Caregiving Appraisal and Psychological Well-Being. Journal of Gerontology. Journal of Gerontology: PSYCHOLOGICAL SCIENCES, 46 (4) : 181-189 (1991) .
- 13). 広瀬美千代, 岡田進一, 白澤政和: 家族介護者の介護に対する認知的評価を測定する尺度の構造 - 肯定・否定の両側面に焦点をあてて. 日本在宅ケア学会誌, 9 (1) : 52 - 60 (2005) .
- 14). Lazarus R, Folkman S: Stress, Appraisal, and Coping. Springer Publishing Company, USA (1984) .
- 15). 新名理恵: 在宅痴呆性老人の介護者負担感 - 研究の問題点と今後の展望 -. 老年精神医学雑誌, 2 (6) : 754 - 762 (1991) .
- 16). 翠川純子: 在宅障害老人の家族介護者の対処(コーピング)に関する研究. 社会老年学, 37:16 - 26(1993) .
- 17). 松岡英子: 在宅要介護老人の介護者のストレス. 家族社会学研究, 5 : 101 - 112 (1993) .
- 18). 和気純子, 矢富直美, 中谷陽明, 冷水豊: 在宅障害老人の家族介護者の対処(コーピング)に関する研究 (2) - 規定要因と効果モデルの検討: 社会福祉援助への示唆と課題 -. 社会老年学, 39 : 23 - 34 (1994) .
- 19). 岡林秀樹, 杉澤秀博, 高梨薫, 中谷陽明, 柴田博: 在宅障害高齢者の主介護者における対処方略の構造と燃えつきへの効果. 心理学研究, 69 (6) : 486 - 493 (1999) .
- 20). 安部幸志: 主観的介護ストレス評価尺度の作成とストレスサーおよびうつ気分の関連について. 老年社会科学, 23 (1) : 40 - 49 (2001) .
- 21). Goldworthy B, Knowles S: Caregiving for Parkinson's Disease Patients: An Exploration of a Stress-Appraisal Model for Quality of Life and Burden. Journal of Gerontology: PSYCHOLOGICAL

- SCIENCES, 63B (6) : 372-376 (2008) .
- 22). 石附敬, 和气純子, 遠藤英俊 : 重度要介護高齢者の在宅生活の長期継続に関連する要因. 老年社会科学, 31 (3) : 359 - 365 (2009) .
 - 23). 天田城助 : 在宅痴呆性老人家族介護者の価値変容過程. 老年社会科学, 21 (1) : 48 - 61 (1999) .
 - 24). 緒方泰子, 橋本廸生, 乙坂佳代 : 在宅要介護高齢者を介護する家族の主観的介護負担. 日本公衛誌, 47 (4) : 307 - 319 (2000) .
 - 25). 赤澤寿美, 岩森恵子, 原田能之, 前原貴美枝, 山村安弘 : 痴呆性高齢者の在宅介護長期継続と中断に影響する因子の検討. 日本地域看護学会誌, 4 (1) : 76 - 82 (2002) .
 - 26). 牧迫飛雄馬, 阿部勉, 阿部恵一郎, 小林聖美, 小口理恵, 大沼剛, 島田裕之, 中村好男 : 在宅要介護者の主介護者における介護負担感に関連する要因についての研究. 日本老年医学会雑誌, 45(1) : 59 - 67 (2008) .
 - 27). 堀田和司, 奥野純子, 深作貴子, 柳久子 : 老老介護の現状と主介護者の介護負担感に関連する要因. 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 33 (3) : 256 - 265 (2010) .
 - 28). 兵藤好美, 田中宏二, 田中共子 : 介護ストレス・サポートモデルの検討 - 寝たきり・痴呆性高齢者の場合 -. 健康心理学研究, 16 (2) : 30 - 43 (2003) .
 - 29). 山本則子, 石垣和子, 国吉緑, 河原宣子, 長谷川喜代美, 林邦彦, 木下知子 : 高齢者の家族における介護の肯定的認識と生活の質 (QOL) , 生きがい感および介護継続意志との関連 : 続柄別の検討. 日本公衛誌, 49 (7) : 660 - 671 (2002) .
 - 30). 小林陽子 : 痴呆症の妻を介護する高齢男性の介護認識とその影響要因. 老年看護学, 9(2) : 64 - 76 (2005) .
 - 31). 堀田和司, 奥野純子, 深作貴子, 柳久子 : 老老介護の現状と主介護者の介護負担感に関連する要因. 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 33 (3) : 256 - 265 (2010) .
 - 32). 杉浦圭子, 伊藤美樹子, 久津見雅美, 三上洋 : 在宅介護継続配偶者介護者における介護経験と精神的健康状態との因果関係の性差の検討. 日本公衛誌, 57 (1) : 3 - 16 (2010) .
 - 33). 西村昌紀 : 夫婦介護におけるストレスプロセス - 構造方程式モデリングによる性差の検討 -. 家族社会学研究, 24 (2) : 165 - 176 (2012) .
 - 34). 沖中由美, 西田真寿美 : 在宅介護における高齢者夫婦のかかわり合いからみた老いの生き方. 老年看護学, 18 (2) : 115 - 122 (2014) .
 - 35). Alley D, Putney N, Rice M, Bengtson V: The Increasing Use of Theory in Social Gerontology: 1990-2004. Journal of Gerontology: Social Sciences, 65B (5) : 583-590 (2010) .
 - 36). Pearlin L, Mullan J, Semple S, Skaff M: Caregiving and the Stress Process: An Overview of Concepts and Their Measures. The Gerontologist, 30 (5) : 583-594 (1990) .
 - 37). McCubbin H, Patterson J : (1983)The Family Stress Process : The Double ABCX Model of Adjustment and Adaptation. Social Stress and the Family. Marriage & Family Review, 6 : 7-37 (1983) .
 - 38). 石原邦雄 : 家族と生活ストレス. 財団法人放送大学教育振興会, 82 (2000) 東京.
 - 39). 石原邦雄 : 家族生活とストレス 講座 生活ストレスを考える 3. 垣内出版, (1985) 東京.
 - 40). 藤崎宏子 : 対処概念にかんする理論上、実証上の諸問題. (石原邦雄編著) 家族生活とストレス 講座 生活ストレスを考える 3, 363-387, 垣内出版 (1985) 東京.
 - 41). 稲葉昭英 : 家族ストレス理論の再構成 - 「家族の状相」概念の導入 -. 家族社会学研究, 1:94 - 102 (1989) .

- 42). 渡辺裕子, 鈴木和子, 正木治恵, 野口美和子: 透析患者をもつ家族の対処に関わる認識に関する研究. 千葉大学看護学部紀要, 2: 107 - 112 (1998) .
- 43). 吉松恵子, 中谷久恵: 在宅療養における胃瘻への家族対処 - 二重 ABCX モデルに基づく分析. 日本在宅ケア学会誌, 17 (1) : 41 - 47 (2013) .
- 44). 堀川尚子: 高齢者の転居と生活適応 - 二重 ABCX モデルを援用して - . 現代社会学, 12: 36 - 53 (1999) .
- 45). 荒井由美子, 田宮菜奈子, 矢野栄二: Zarit 介護負担尺度日本語版の短縮版 (J - ZBI_8) の作成: その信頼性と妥当性に関する検討. 日本老年医学会雑誌, 40(5): 497-503(2003).
- 46). 独立行政法人国立長寿医療研究センタープレリリース「Zarit 介護負担尺度日本語版短縮版 を利用して、在宅で家族を介護している方の抑うつ症状の有無を簡便に判定できる目安を設定」 (2014)
http://www.ncgg.go.jp/topics/documents/Arai_Press_20140822.pdf, 2017.7.4 取得
- 47). ウヴェ・フリック, 小田博志: 質的研究入門: 「人間の科学」のための方法論. 春秋社, 393-400 (2011) .
- 48). 松岡英子: 寝たきり老人を抱える家族のストレスと対応. (石原邦雄編著) 家族生活とストレス 講座 生活ストレスを考える 3, 57-87, 垣内出版 (1985) 東京.
- 49). 松岡英子: 在宅老人介護者のストレスに対する資源の緩衝効果. 家族社会学研究, 6: 81 - 95 (1994) .
- 50). 広瀬美千代, 岡田進一, 白澤政和: 家族介護者の介護への否定的評価に対する資源による緩衝効果. 日本在宅ケア学会誌, 10 (2) : 24 - 32 (2007) .
- 51). 岩田昇, 堀口和子: 要介護者の性別および家族介護者の続柄別に見る在宅介護の認知評価, 対処方略および生活への影響の相違. 日本公衛誌, 63 (4) : 179-189 (2016)
- 52). 湯原悦子: 介護殺人事件から見出せる介護者支援の必要性. 日本福祉大学社会福祉論集, 134:9-30(2016) .
- 53). 湯原悦子: 介護殺人事件から見出せる介護者支援の課題. 日本福祉大学社会福祉論集, 125:41-65(2011) .
- 54). Joseph R, Goodfellow L, Simko L: Double ABCX Model of Stress and Adaptation in the Context of Families That Care for Children With a Tracheostomy at Home. Advances in Neonatal Care, 14 (3) : 172-180 (2014) .
- 55). Sayegh P, Knight B: The Effects of Familism and Cultural Justification on the Mental and Physical Health of Family Caregivers. Journal of Gerontology: PSYCHOLOGICAL SCIENCES, 66B (1) : 3-14 (2010) .
- 56) 野川道子: 看護実践に活かす中範囲理論第 2 版. 5-7 (2016) 東京.